

IWC下関会議周辺見聞録

前田博司

1、国際捕鯨委員会 (IWC) 下関会議 — “会議は踊る” —

アジアの東隅、日本列島の片隅でのひとときのお祭り騒ぎが“無事”に過ぎ、勸進元の下関市民にとってはそんな会議もあったっけと、早くも市政の年間ニュースの一コマでしかなくなりつつある。忘却の淵を渡り終えないうちに、その総括をしておく必要がある。

2002年(平成14年)4月25日から5月24日にかけて、下関市の「海峡メッセ下関」で開催された第54回国際捕鯨委員会(IWC)年次会合は、4月25日、26日には南氷洋ミンク鯨アセスメント作業部会、続く27日から5月9日までは科学委員会が開催され、5月12日から18日は加盟国の分担金拠出方法や商業捕鯨再開の条件となる改訂管理制度(RMS)について協議する作業部会が開かれた。5月20日から24日にかけて総会が開かれ、加盟国44ヶ国、ほかにオブザーバー1ヶ国が参加した。

今回の年次会議総会の主要議題は次の通りであった。

- 1、資源量を減少させない捕獲頭数を算定し、捕鯨を監視、規制する改訂管理制度(RMS)の完成
- 2、反捕鯨国が提唱するサンクチュアリ(禁漁区)の範囲拡大
- 3、日本沿岸でのミンククジラ50頭の暫定捕獲枠
- 4、イワシクジラ50頭と、暫定捕鯨枠とは別の日本沿岸でのミンククジラ50頭を追加する今夏の日本の北太平洋調査捕鯨計画—など。

5月20日の総会開会日には江島潔下関市長が挨拶し「海洋資源の利用 前向きに議論を」と話した。またアイスランドの正式加盟が否決されたために、同国代表団が抗議退場するというハプニングもあった。

21日に議題となった、(1)日本沿岸でのミンククジラ50頭の暫定捕獲枠を求める議案(日本提案)は、賛成20、反対21、棄権3で否決(88年から13回連続)。

(2)南太平洋と南大西洋のサンクチュアリ(禁漁区)化案(ニュージーランドとオーストラリアが要求)は、賛成24、反対16、棄権5で否決。

(3)インド洋の禁漁区廃止を求める議案(日本)は、反対意見が相次ぎ、取下げ。

(4)「鯨の資源状況に関係なく捕獲禁止」とする南極海禁漁区に関する国際捕鯨取締条約の付表について、科学的データに基づきIWC科学委員会が勧告した場合のみ捕獲禁止と改めるよう提案(日本)。賛成17、反対25、棄権2で否決。

22日には、米國とロシアが、アラスカ・イヌイトとチュクトカ(ロシア)の先住民生存捕鯨で、2003年から5年間、従来通り計280頭枠のホッキョククジラの捕獲枠を要求した(米ロの共同提案)が、日本の反発により紛糾し、日本は採決を求めて譲らなかったため、決定に至らなかった。

23日には、前日提案の先住民生存捕鯨枠は、日本の要求が通って採決の結果、賛成30、反対14、棄権1で否決。ついで、鯨資源を減らさず捕鯨を進める「改訂管理制度」(RMS)を日本が提案したが、賛成16、反対25、棄権2で否決。

24日は、日本が和歌山県太地町などに限定したうえでミンククジラ捕獲枠を年間25頭、5年間とする提案は、賛成17、反対27、棄権1で否決。

また、先住民生存捕鯨枠についての米ロ修正案(5年間でホッキョククジラ280頭)を、賛成32、反対11、棄権2で4分の3以上に届かなかったために、再び否決。

カリブ海のセントビンセント・グレナディーンの前住民捕鯨のザトウクジラ捕獲枠(5年間計20頭)をはじめ、グリーンランドの前住民捕鯨については合意。

加盟国の分担金を経済力に応じて見直す暫定案については、賛成21、反対12、棄権2で可決し、これが今総会唯一の可決議案となった。

まさに“会議は踊る”といった状況に終始し、今回もまた決議の“無事”を確認するだけのセレモニー総会であった。なお総会の状況は、インターネットのホームページで中継された。鯨に関する話題を提供している鯨ポータル・サイトで公開されたものである。

会議の詳細な経緯については、水産庁の公式報告に委せることにして、この会議開催に関する下関サイドの動きと、これと並行してなされた下関市やその近辺でのイベントなどを追ってみよう。

2、会議開催までの道筋一とにもかくにもIWC一

新聞(2002年1月22日付け毎日新聞)によると、“99年暮れ。東京の居酒屋だったか。江島潔・下関市長は、同席していた小松正之・水産庁参事官の言葉を今もはっきり覚えている。「(IWC会議を)日本でやるとしたら、下関は本当に受けてくれますか。」IWC会議の誘致は江島市長の夢だった。”とある。

1996年に完成した県国際総合センター(通称「海峡メッセ下関」)は、これまでその「国際」の名にふさわしい会議がなかったこともあって、同センターの副理事長でもある市長の思惑と、1993年のIWC会議を京都で行い“(京都から)10年たったなら日本でやりたかった”とする小松参事官の思惑とが合致して、今回の下関会議が実現したものである。“下関市は、平成8年(1996年)に国際会議観光都市として国から認定を受けました。それ以来、初めての本格的な国際会議となるIWC年次会議を成功させることは、下関にとって大きな経済効果をもたらすとともに、観光コンベンション都市、また水産都市、国際都市として自立するためにも重要なステップとなります。”(市報「みらい」平成14年3月15日号3ページ)とある記述は、そうした市の願望を如実に示している。

有力な対抗馬が現われるのを恐れて、その立候補表明は2000年7月のオーストラリア・アデレード会議開催の直前まで秘され、すでに立候補の意思表示をしていた反捕鯨国ニュージーランドを相手に、初めての無記名投票によって19対10で開催を決めた。ニュージーランドが開催地を一つに絞りきれなかったのも勝因の一つとされる。

下関市では、会議開催へ向けて、水産課内に職員4名の「IWC推進室」を置き、次いで2001年10月31日には「IWC下関会議下関市実施本部」を設置した。実施本部には専門班5班、計26人を配して、事務局である「IWC推進室」から示された素案を実行に移すようにした。2002年1月の段階でも、班員にとっては“どんなことをやればいいのか見えてこない”との不安があった。それほど“IWCとは何?”という状況であったと言える。「IWC推進室」ではホームページも開設した(2月22日報道)。

また市は、市内の経済団体などを糾合して「下関市IWC会議推進実行委員会」を立ち上げ(2001年11月設立)、「IWC推進室」はその事務局も兼ねた。会議の運営に必要な語学ボランティアも市報(平成14年1月1日号)などで公募した結果、目標の2倍に当たる300名以上を確保できた。市で初めての国際会議へのハードルは何とか埋められていったのである。

またPRとしてキャンペーンマークの鯨をあしらった缶バッジを発売(1月22日報道)し、下関市役所前の広場には鯨のイルミネーションを設置して市民の目を楽しませた。

3、捕鯨船団との関わりー“どんとどんとどんと、波乗り越えて〜”

2001年11月6日、あるかぼーとの岸壁では日新丸を母船とする第15次南氷洋鯨類捕獲調査船団5隻の出港式が行われた。下関に船団が集結しての出港はこれで4年目である。式は財団法人日本鯨類研究所と下関市の主宰で開かれ、“乗組員や家族、中央・地元の捕鯨・鯨食関係者、地元小学生や市民ら約1000人が出席した。”(下関くじら食文化を守る会誌『いさな』4号18ページ)

下関市には、捕鯨業に関わる大洋漁業株式会社(現マルハ)の本社が1949年まであり、本社が東京に移転した後もその下関支社を基盤に、系列会社の林兼造船株式会社で多数の捕鯨船を建造し、捕鯨船団もたびたび下関から出航した実績を持つことから、市民にとって捕鯨船はこれまでもキャッチャーボートと呼ばれて、親しみ深い存在であった。

地元の林兼造船で1962年に建造された第25利丸が、9月に永年の航海を終えて、この下関市の維持管理のもとに永久保存されることになったのも、今回のIWCをめぐる動きと無縁ではない。

シロナガスクジラを実物大にかたどった「鯨館」(1958年大洋漁業が寄贈)が、長府外浦の旧水族館敷地にあったが、このたびのIWC会議の開催を機に、外装の塗り替えが行なわれた。新聞はこれを「お色直し」と表現した。

4、下関におけるIWC会議の影響ー鯨の“てんこ盛り”ー

(1) メディアの扱い

IWC下関会議の開催について、下関市は、市報『みらい』にしばしば紹介した。2002年3月15日号は「特集・IWC下関会議」とされた。各新聞社にもそのPR方を依頼し、水産庁からの強い力副えもあって、各社はこれに関わる様々なイベント情報を大きく取り上げた。

2002年1月から8月までの間に報道されたIWCや鯨に関わるニュースは、毎日新聞で試みに拾いあげただけでも、128記事・22,323cm²の枠組を数えた。

その内訳は、総合版に52記事(41%)・12,211cm²(55%)、ローカル(下関)版に76記事(59%)・10,112cm²(45%)であった。

その掲載月別では、1・2月が12記事(9%)・1,938cm²(9%)、3月が11記事(9%)・2,320cm²(10%)、4月が29記事(23%)・4,197cm²(19%)、5月が66記事(52%)・11,815cm²(53%)、6月以降は10記事(8%)・2,053cm²(9%)、であった。

何でもいから下関で「国際会議」を持ちたいという市の願いがようやく実現したのである。たまたまそれが鯨に関わるものであったのかもしれない。

2002年10月に発行された下関くじら食文化を守る会の会誌『いさな』第4号は、この会議の成功を大々的に報じている。

『いさな』第4号に掲載された内容を、項目だけ紹介しておく。

一步前進した下関IWC総会 小松正之(水産庁漁場資源課長)

国際捕鯨委員会(IWC)下関会議を終えて 石川康雄(下関市産業経済部次長・元下関市IWC推進室長)

『いさな』第4号発刊に寄せて 江島潔(下関市長)

Photo report

第54回国際捕鯨委員会(IWC)年次会合の結果について 水産庁

『鯨大学』(下関市立大学教養講座)開講記 鯨大学コーディネーター 山戸輝雄(下関市立大学教授)

「くじら感謝碑」建立について

韓国蔚山(ウルサン)の鯨祭りに参加して 多部田修(長崎大学名誉教授・本会理事)

ナンタケット島紀行 下関クジラ食文化を守る会会長 和仁皓明(東亜大学教授)

鯨館と人形と焼きうどん 富田義弘(作家)

第一回日本伝統捕鯨地域サミット《レポート》 安富静夫(当会幹事)

鯨類調査船団が南氷洋へ、データ積み上げIWC成功を

「くじらネクタイ」について 河邊治男(株式会社下関大丸取締役社長・当会理事)

「下関クジラ物語」刊行顛末記 岸本充弘

平成13~14年度下関くじら食文化の会「活動日誌」

この項目を見るだけでも、2001年から2002年にかけて、当地で行なわれた鯨に関連した出来事が展望できる。

(2) 市民ボランティアの活躍

ともあれ市側がこの会議の成功に向けて急遽立ちあげた市民ボランティアは、期待通りのホスピタリティーぶりを発揮し、捕鯨・反捕鯨国を問わず称賛を受けた。下関市というローカルブランドが一躍世界的な知名度を獲得したという感触を、市当局は得たようだ。

水産庁の報告にも、IWCによって“下関市及び日本政府に対して、市民のもてなし、会議運営などにつき、高い賞賛と賛辞が与えられた”とある。

(3) 鯨食のPR

水産庁は、今回の会合を盛り上げるためにもと、下関市内の小中学校や長門市通小学校などで鯨肉カレーや竜田揚げの給食を実施し（5月2日～21日）、また特別養護老人ホームにも積極的に鯨肉を贈り、鯨食のPRにつとめた。

会議のPRイベントとして、第6回海の幸フェスティバル「ガンバレ日本・捕鯨再開」が4月13、14日に開催され、ここでも鯨の竜田揚げ、鯨汁、カレーなどが無料で配布された。13日のおいしい鯨料理コンテストでは、水産庁長官賞が与えられた。5月1日から7日までは「クジラは21世紀の大切な食糧資源」とのテーマを掲げたIWC応援の「鯨まつり」が下関大丸で開催された。ここでも連日鯨料理が一部無料あるいは割引販売された。

鯨肉を扱う地元食品会社では、1月から鯨肉入りソーセージを「レトロソーセージ」と命名して発売した。4月24日に開業した唐戸の観光魚市場「カモンワーフ」には、鯨の専門店が出店し、鯨肉を使った食品類を販売した。市内の鯨料理店では、外国人向けに「セットホエール」と名付けた特別メニューを出したりもした。

4月28日には、市主催のIWC歓迎レセプションが海響館で開かれ、多様な鯨料理が会場を賑わせたが、反捕鯨国の委員はそれには手を出さなかった。5月20日にも総会出席者を迎えて、同様の歓迎レセプションが開催された。

(4) 「鯨大学」の開講

下関市立大学では、教養講座として「鯨大学」を開講した。4月15日から7月15日にかけて12回の講義が持たれ、学生302名、一般156名が受講した。反捕鯨・鯨保護の必要性を主張するNGOの立場からの講義もあって、広く鯨についての課題がとりあげられた。“捕鯨を巡りいろんな考えがあることが分かり有意義だった”とする意見が、受講した学生から聞かれた。

また当学大学院生の岸本充弘が修士論文として「下関における鯨産業発達史」を提出し、これをもとにして、同氏と安富静夫の共著で『下関クジラ物語』が発行された。

(5) 「くじら感謝碑」の建立

2002年4月13日「くじら感謝碑」が市立水族館「海響館」の東側に建立された。下関くじら食文化を守る会の提唱で、シロナガスクジラをかたどったものとし、製作費用は942万2000円であった。

(6) イベントさまざま

1月下旬には下関マリンホテルの玄関には親子鯨のイルミネーションが登場した（5月下旬まで）。地元百貨店の下関大丸ではオリジナルの「くじらネクタイ」を発売した。会議開催を記念して、純金・純銀製の鯨の置物も発売された。

4月25日には、鯨と街を描いたIWC下関会議開催に因んだ記念切手（80円）が中国郵政局から発売（400万枚）された。下関の空をシロナガスクジラが泳いでいる姿を図案化したもので、地元のイラストレーター藤本秀志さんの作品がコンペ形式で選ばれた（4月3日報道）。

5月19日には、持続的利用世界議員連盟の臨時会合が12ヶ国から国会議員など60人が出席

して開催された。5月20日には「地域社会と鯨に関する全国自治体サミット」が下関市で開かれ、宮城県・山口県・下関市の主催で、全国10市11町から約300名が出席した。

なお5月21日には、IWCにあやかった無線操縦の鯨形清掃船IWC (I'm Whale, Cleaner=私は鯨、掃除機です)が唐戸棧橋近くで試運転し、水面のごみを呑み込んでいたのはご愛敬だった。

5、長門市での動き－“古式捕鯨”の掘り起こし－

長門市は、藩制期(江戸時代)には、捕鯨の伝統があった。明治期に入ってその伝統は廃れたが、当時の資料は大切に保存され、鯨を吊ったくじら墓や、捕った鯨の戒名を記した過去帳(向岸寺)などが遺っている。

この長門市で、2月に「長門大津くじら食文化を継承する会」が設立された。同市の通浦などで行なわれていた古式捕鯨を広く紹介することによって、当地区における“捕鯨”の伝統を誇示する狙いもあったと思われる。

3月21日には、長門市の「ルネッサながと」で財団法人日本鯨類研究所・長門市・長門市教育委員会の共催で「第一回日本伝統捕鯨地域サミット」が開催された。会合では「長門宣言」として、“持続的捕鯨を存続させ、先人たちが築いた捕鯨文化を守り、継承することを決意する”という宣言が採択された。そのレポートが『いさな』4号に載せられている(16～17ページ)。

5月11日にはIWC会議出席の外国人科学者らを招待して、鯨墓などに案内し、長門市主催でパネルディスカッション「鯨文化へのいざない」が開催された。

6、反捕鯨団体の動き

2001年11月6日の調査船団出港式に、国際環境保護団体「グリーンピース・ジャパン」の4人が、目玉のかぶりものをして、横断幕を掲げて抗議を行なった。下関では初めての反捕鯨活動であった。

同年11月に結成された「クジラ保護連絡協議会」は、2002年1月22日に下関市役所で記者会見して、反捕鯨の立場を表明した。

5月19日から23日にかけてグリーンピース・ジャパンが会場近くに「グリーンピースひろば」を開設し、19日には同会など4団体で作る「クジラ保護連絡協議会」が海峡ゆめ広場でライブコンサートを開催、続いて「クジラ保護シンポジウム」を催した。「反捕鯨」の立場に変わりはないが、柔軟路線を市民に印象づけたようだ。新聞は“抗議行動なく静かな開幕”と表現した(4月26日付け毎日新聞)。

同団体メンバーが話した“(IWC下関会議への)水産庁の並々ならぬ意気込みを感じる”という印象は、会議の最後まで続いたようだ。

余談ではあるが、19日、捕鯨反対国やNGOに抗議する右翼の街宣車160台が会場周辺に押

し寄せて示威走行を繰り広げた。これに対し下関署には18件の苦情が寄せられた。

7、「宴（うたげ）」のあとー“お祭り済んで日が暮れて”ー

2002年5月24日、IWC下関会議は何等の成果をもたらさないまま、文字通り“無事”に終了した。この日を境に鯨に関わる報道は激減した。多くの新聞がIWCに関する総括記事を書いて、一連の「鯨騒ぎ」は終焉したのである。

終焉記事の掉尾を飾ったのは、シリーズとしては地元の山口新聞による「鯨の街の1カ月」（6月4日から8日までの5回連載）であり、毎日新聞下関版6月9日付けの「IWC会議を振り返って」である。

山口新聞の副題は「IWC下関会議を終えて」であり、第1回は「初の大型国際会議」として、「[完べきなもてなし] スタッフ大奮闘に賛辞」と見出しが付けられた。

第2回は「経済波及効果」として、“業種で明暗くっきり、国際都市信認に期待”、

第3回は「ホスピタリティー（もてなし）」として、“満足顔の会議参加者、国際都市下関をPR”、

第4回は「クジラ食文化」として、“反対派にも味好評、奏功した捕鯨基地開催”、

第5回は「明日へ」として、“大成功のホスト役、国際会議誘致へ自信”とある。

毎日新聞は「やまぐち見聞録」の枠で、“語学ボランティアら活躍、下関のもてなし高評価”とキャプションを付けた。他紙も同様な趣旨のシリーズを載せたのである。

つまり各新聞の評価は、主として、開催地下関の「初の大型国際会議」が、市民の「ホスピタリティー（もてなし）」溢れる協力によって、「大成功」裡に終了し、会議関係者やメディアを通じて「国際都市」としての下関の名を世界的に広めた、という点にある。江島下関市長も、今総会における市民のホスピタリティーを称賛している。

山口経済研究所が試算した約4億4500万円の経済波及効果（4月30日公表）に加えて、“経済効果は会議期間中に限られ、国内外への観光PR効果などはカウントしておらず、同研究所は「下関の認知度の高まりや市民への心理的な影響を考えれば、効果は計り知れない」としている。”と新聞は報じている（5月1日付け中国新聞）。IWC下関会議についての公的総括は、いずれ下関市サイドでなされるだろうが、いまのところ、今回一連の鯨騒ぎは、どうも単なる「一過性」の現象にとどまった感じがする。確かに下関市の「知名度」は世界的に高まったかもしれないが、こと「鯨」に関しては、効果的であったとは言いがたい。

今回のIWC総会に関する人々の関心はどうかを判断する材料のひとつとして、各紙の読者の声の欄にIWCあるいは「捕鯨」や「鯨食」に関する投書がどの程度なされるかを注視していたが、私の知る範囲内においては、あまり見受けられなかった。つまり一般人の関心を惹かないイベントとしてIWC会議が催され、「捕鯨」論議が行われたということである。“鯨の増加は水産資源の損耗をもたらす、だから鯨は捕っていい”といった奇妙な論理がまかり通り、地元バスのボディにもそういった趣旨が広告として記された。

海外からIWC関係者が500人来るので、その人たちのもたらす経済効果を市としては期待

していたようだが、期待ほどではなかったようだ。科学委員会のメンバーの購買ぶりはつまり、近くのスーパーなどで食材を買い求めて質素な食事ですませた者がほとんどであったという。一方、総会に参加した委員は、北九州市あたりのホテルを利用する者が多く、下関市での宿泊は意外と少なかったらしい。

“IWC会議推進実行委が解散 下関市 下関市であった国際捕鯨委員会（IWC）年次会議（4月25日～5月24日）の市IWC会議推進実行委員会が、（7月）31日、解散した。解散式で林孝介会長は「地元への対応が好評を得て『国際会議をいつでも開ける』という自信を持った」と述べた。約1891万円の剰余金が発生したため、委員会は出資比率に応じて返還する。”と新聞は報じた（2002年8月1日付け毎日新聞（下関））。それに先立つ6月25日には、IWC下関会議推進協議会が解散した。

2003年の年頭にあって、2002年の市政重大ニュースを下関市は発表した。その10項目の一つに「国際捕鯨委員会（IWC）下関年次会議を開催（4・5月／水産課）」とある（2003年1月1日付け毎日新聞）。また年賀の市長挨拶にも“春にはIWC下関会議、秋には世界地方都市十字路会議が開催され、市民あげての温かいもてなしに高い評価をいただき、国際会議観光都市として輝かしい第一歩となりました。”とある（2003年1月1日付け毎日新聞）。

8、若者の反応— “くじら、くじら、くじらを食べると～”

この秋（2002年10月25日）、当学で非常勤講師として担当している「地域論」の受講生に次の質問をした。受講生は主に2年生である（回答数306）。

(1) 鯨肉を食べたことがありますか。それはいつですか。味はどうでしたか。

| | |
|---------------|-----|
| ある | 221 |
| ない | 77 |
| 覚えてない | 8 |
| 教養総合の講座（鯨大学）で | 26 |
| 小学校の給食で | 38 |
| おいしかった | 61 |
| 普通 | 18 |
| おいしくない | 69 |
| 覚えてない | 19 |

若者は、鯨肉をあまりおいしいとは感じていない。

(2) 今年、鯨類に関するニュースを知っていますか。それは何でしたか。

| | |
|--------------|-----|
| IWC下関会議の開催 | 143 |
| 下関で鯨の会議があった | 80 |
| 鯨が海岸に打ち上げられた | 21 |
| 鯨について何かのニュース | 19 |
| よく知らない | 38 |

下関市立大学の鯨講座 3

無記入 3

IWAP, IWGP, WCO, WCP, WIC, WRC, WWC, W?など、誤字もにぎやかであった。

(3) 鯨は“捕獲しても良い”と思いますか。

肯定的な回答 231

否定的な回答 60

どちらともいえない 12

わからない 3

“現代の日本文化において鯨肉の消費は必要なのでしょうか。”“下関がもう一度捕鯨の街と言われる日がくると思いますか。”などという醒めたコメントも見られた。

1999年10月29日、「地域論」の受講生に“下関の名産を挙げてください。”と設問したことがあるが、このときの順位は、次の通りであった。

1、ふぐ(ふく) 83

2、巖流焼 22

3、うに 16

4、瓦そば 13

5、かまぼこ 12

6、海産物・水産加工品 9

7、くじら 6

現在はどうか知らないけれど、下関の名物が一般的には「ふぐ、うに、くじら」と言われながら、鯨があまり周知されていないのは、日常の食材から鯨が脱落しているからではないか。もはや鯨は、熟年層のノスタルジーをかきたてるようなレトロな食材としてか、あるいは旅先での「珍味」としてしか認識されなくなっているのかもしれない。

9、結 語— “青い地球は誰のもの？” —

戦後しばらくは、鯨肉は日本人の貴重な食糧として、庶民の「チャブ台」を賑わせた。美味とされる「尾の身」にはあまり縁がなかったけれど、赤身や“おばいけ”などの鯨の各部位が、それぞれ工夫された調理によって人々の胃袋に収まり、私たちの空腹を補った。また敗戦によって四つの島に閉じ込められた日本人にとって、我が国捕鯨船団による南氷洋“捕鯨オリンピック”での活躍ぶりは、戦後の閉塞状況からのつかのまの解放感をいだかせるものであった。

日本が「戦後」の復興に励み、「追いつき追い越せ」の血のにじむような努力の結果、とにもかくにも「ジャパン・アズ・ナンバーワン」が成り、ついには世界の食材を喰いあさる「飽食社会」をもたらした。一般の人々にとって、今や鯨は必要な食糧資源ではなくなっている。もちろん鯨を伝統的な食材として重用している地域があることは十分承知している。だがそれと同列に、下関の“鯨食文化”を置いていいのかどうかは疑問である。つまり“鯨食”が、下

関在住の我々にとって本当に中身のある伝統的な食習慣なのか、いまなおすっきりしない。一時的な疑似カルチャー現象として、下関の“鯨食”は在ったのではないだろうか。あえて“鯨食文化”と呼称するには、あまりにもはかない“時のうつろい”に過ぎなかったように思われる。

まして、前にも述べた“鯨の増加は魚資源の損耗をもたらす、だから鯨は捕って（食べて）いい”といったヒトを食物連鎖の頂点に据えた思考では、「宇宙船地球号」はスムーズに運航できない。鯨の増加＝魚資源の損耗＝ヒトへの脅威とする短絡的な見解はいかがなものか。

ともあれ21世紀のヴィジョンは、ヒトと他の生物との共存・共生だとの主張が高まり、鯨たちとは“ホエール（あるいはイルカ）ウォッチング”といった付き合いが注目されている。イルカとのスキンシップを“癒し”効果として利用できないかといった試みも、始められていると聞く。それ以外にも画期的な付き合い方が見つかるかもしれない。

IWC下関会議を終えたいま、あとに何が残ったのか。一連の鯨のお祭り騒ぎは、あれは何だったのだろう。2002年、下関は“港町”として、確かに“外向き”であった。そして2003年、下関市は「武蔵MUSASHI」に夢中になっている。

「IWC下関会議周辺見聞録」と題してはみたものの、私なりに“見・聞”した結果は、結局このようないささかオタク的な“結語”に終わってしまったようだ。

付属資料(1)

国際捕鯨委員会 (IWC) 下関会議関連年表 (平成12~14年)

| 月 | IWC会議関係 | 山口県内におけるIWCへの対応 | 山口県域における鯨関係の報道 |
|-------------|-------------------------------|---|---|
| 平成12年 6月 | | 下関市が2002年のIWC開催地に立候補(29日) | |
| 7月 | IWC年次総会(3~6日)オーストラリアのアデレードで開催 | 2002年IWC総会の下関開催が決定(6日) | |
| 8月 | | 江島下関市長が帰国会見し「鯨食文化を世界に示す」と抱負を述べる(10日) | |
| | | 下関市は水産課内に、IWC開催準備室を7月6日付けで設置と発表(9日) | |
| | | IWC総会に北九州市が協力すると両市長が合意(29日) | |
| 平成13年 1月 | | 1月から下関青年会議所が組織内にIWC特別委員会を設置 | 4月1日水族館「海響館」開館 |
| 7月 | IWC年次総会(23~27日)ロンドンで開催 | 下関市長はIWCロンドン総会に出席し、下関総会の歓迎を表明 | 6月25日下関くじら食文化を守る会が鯨の感謝碑建立を決定 |
| 8月 | | IWC下関会議推進協議会設立(23日) | |
| 10月 | | IWC下関会議推進協議会(東京)に、山口県・長門市・下関市・下関くじら食文化を守る会が参画(23日) | |
| 11月 | | 下関市水産課内にIWC推進室を設置(1日) | |
| 12月 | IWC下関会議準備事務局を水産庁内に設置(19日) | IWC下関会議下関実施本部を設置(31日) | |
| | | 下関市IWC会議推進実行委員会を設置 | |
| 平成14年 1月 | | IWC下関会議準備事務局(水産庁)に下関市職員も参加 | |
| | | 市IWC会議推進実行委員会総会開催、予算案承認、PRとしてキャンペーンマーク缶バッジを発売することとする(22日) | マル幸商事が鯨肉入りソーセージの「レトロソーセージ」を発売(1月) |
| | | 「クジラ保護連絡協議会」が下関市役所で反捕鯨の記者会見(22日) | 下関マリンホテル玄関に親子鯨のイルミネーションが登場(22日) |
| | | 下関市IWC推進室がホームページを開設 | |
| 2月 | | | 第16回女のまつりの特別企画としてIWC会議下関開催を記念して鯨汁・鯨の竜田揚げを無料提供 |
| | | | 長門市で「長門大津くじら食文化を継承する会」を設立 |
| | | | 長門市通小学校の給食に鯨肉を使用(14日) |
| 3月 | | 下関市市報「みらい」3月1日号に、下関市立大学の教養総合講座「鯨大学」を紹介 | 豊閑地区の特養ホームに、下関くじら食文化を守る会が鯨の竜田揚げを贈呈(9日) |
| | | 下関飲食組合で下関くじら食文化を守る会の和仁会長が「捕鯨をめぐる最近の話題」を講演(14日) | 下関大丸でオリジナル鯨ネクタイを販売(15日報道) |

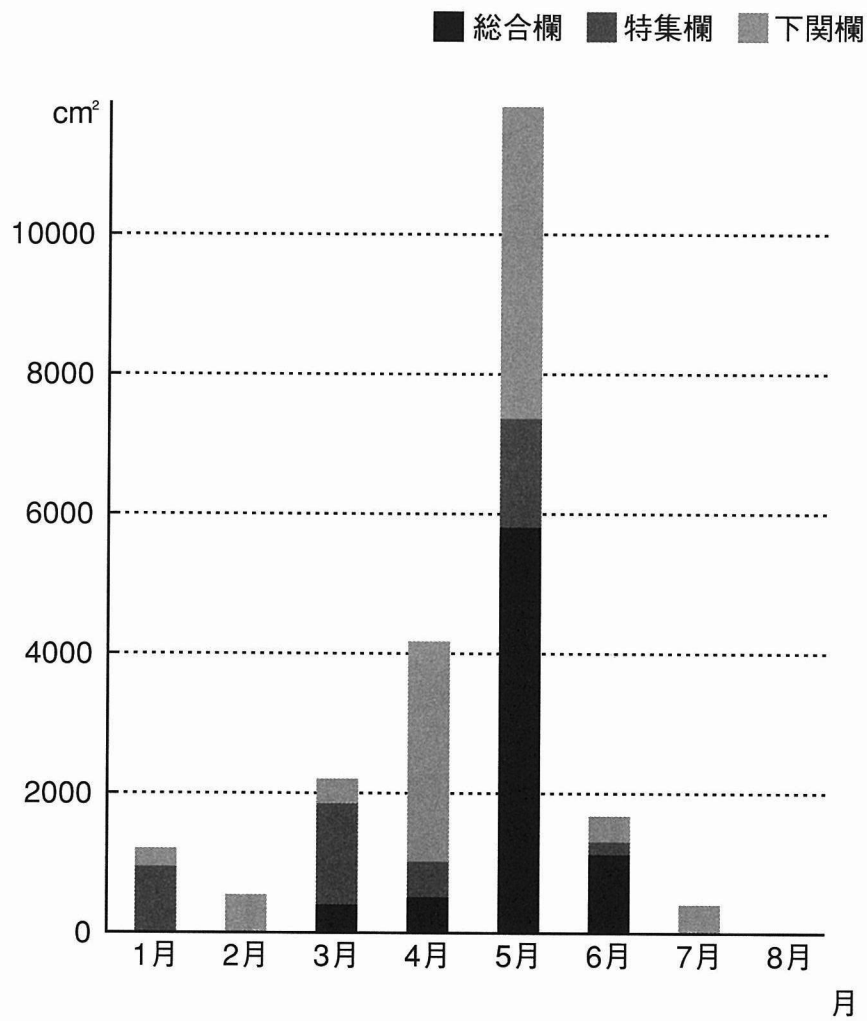
| 月 | IWC会議関係 | 山口県内におけるIWCへの対応 | 山口県域における鯨関係の報道 |
|------|---|--|---|
| 3月 | | 下関市市報「みらい」3月15日号にIWC下関会議を特集 | 長門市で「第1回日本伝統捕鯨地域サミット」を開催、テーマは「古式捕鯨(江戸時代)と文化」。会場で通小学校児童が「通鯨唄」を披露(21日) 岸本充弘さんが下関と鯨の関連を調査した下関市立大学の修士論文「下関市における鯨産業発達史」を提出。 |
| 4月上旬 | 世界自然保護基金・日本事務所(WWFジャパン)が個体数把握などを条件に商業捕鯨容認に転換し「絶滅種でない鯨に限り、徹底した管理制度が作られれば商業捕鯨再開を否定できない」との見解を発表した(1日)が、反発があいつぎ、2日後この見解はホームページから削除された。 米国代表団トップが、「日本の調査捕鯨計画には科学的根拠なし」と指摘し「調査捕鯨中止へあらゆる手段」ととる発言(10日) | 英会話ハンドブックを子ども会・PTAが作成(3日) 外国人向けの救急マニュアルを地区消防本部で作成(3日) 下関グランドホテルで従業員の英会話研修会が始まる(5日) 下関グランドホテル正面に鯨のイルミネーションお目見え、IWCの閉幕まで点灯(6日) IWC会場前に「バナー」を設置(10日) | 鯨肉入りソーセージ「レトロソーセージ」がコンビニ店に並びはじめた。(2日から) 記録映画「鯨捕りの海」拡大実行委員会を開催(3日) 調査捕鯨船第25利丸、第1京丸の2隻が下関に入港(4日) 下関市長が捕鯨船第25利丸を譲受ける旨の発言あり、博物館に活用検討(4日) 山陽町の永山酒造が、IWC記念鯨形ビンの米焼酎「関鯨(かんげい)」を発売(10日) 下関大丸で純金・純銀製シロナガス鯨の置物を販売(10日) 市内の鯨料理店が鯨料理2割引鯨感謝デーを実施(7~13日) |
| 4月中旬 | 『日本沿岸捕鯨の興亡』を著した近藤徹さんの日本近海の鯨乱獲が資源の枯渇をもたらしたとするデータがIWC科学委員会に提出される(17日報道) | 英会話マニュアルと英語版下関ガイドマップを市推進実行委員会が作成(11日) 「IWC下関会議推進協議」の捕鯨推進キャラバン隊第3隊が鹿児島県大浦町を出発(11日) 全国を巡った「IWC下関会議推進協議」の捕鯨推進キャラバン隊(第1、2隊)が下関に到着(12日) プレイベント「くじらの国際会議としものせきの未来を考える」を開催し、鯨に関するミュージカル「ドリーマー」上演や「私たちにとってのIWC下関会議」のシンポジウムを開催(14日) 下関市立大学の公開講座「鯨大学」が開催される(7月15日まで12回)(15日) グリーンピース・ジャパンが下関駅に反捕鯨のポスターを1週間展示(20日) 20日付けの各新聞にグリーンピース・ジャパン反捕鯨の図柄を広告掲載。 | 安富・岸本共著『下関クジラ物語』を出版(11日) 捕鯨記録映画「鯨捕りの海」を長門市で上映(11日) 下関くじら食文化を守る会提唱の「くじら感謝碑」除幕式(13日) PRイベントとして第6回海の幸フェスティバル「ガンバレ日本・捕鯨再開」を開催し、鯨の試食、鯨料理教室開催、鯨肉や缶詰の販売、ミンク鯨のひげをプレゼント(13・14日) おいしい鯨料理コンテストに柳川さんが水産庁長官賞受賞(13日) 下関中之町郵便局でくじらグッズ展を開催(5月13日まで) |
| 4月下旬 | 国際捕鯨委員会(IWC)が開幕(25日) (反捕鯨団体の抗議行 | IWC語学ボランティアの最後の研修会を開催(21日) 下関市立大学の公開講座「鯨大学」第2回 | 下関造園クラブが海峽夢広場にカズラでオブジェを製作、21日から5月24日まで展示。 |

| 月 | IWC会議関係 | 山口県内におけるIWCへの対応 | 山口県域における鯨関係の報道 |
|------|--|---|--|
| 4月下旬 | <p>為がなく静かな開幕)</p> <p>25、26日南氷洋ミンク鯨アセスメント作業部会を開催</p> <p>27日から科学委員会(12分科会)を非公開開催(5月9日まで)</p> <p>イワシ鯨50頭と日本沿岸でのミンク鯨50頭を新たに調査捕鯨の対象とすることを日本側が提案。</p> <p>鯨をそのまま捕らないと30年後には三陸沖から鯖が消えるとする遠洋水産研究所の調査が科学委員会に報告される(25日報道)</p> | <p>に、反捕鯨の立場で、くじら保護連絡協議会代表幹事の舟橋直子さんが「NGOからみたクジラ」を講演(22日)</p> <p>「IWC下関会議推進協議」の捕鯨推進キャラバン隊(第3隊)が23日下関に到着</p> <p>東京で持続的利用日本議員連盟の設立総会。鯨を含む生物資源全般を運動の対象とし、5月19日下関で会合を決める(24日)</p> <p>山口大学附属中学校の2年生が24、25日にIWC会場などを訪ずれ「下関と鯨のかかわり」を学んだ(5月22日発表会)</p> <p>中国郵政局は鯨と街を描いたIWC下関会議記念切手(80円)を25日から発売(400万枚)、記念スタンプも用意</p> <p>IWC会場に外国通貨6種の臨時両替所を開設(25日)</p> <p>市主催のIWC歓迎レセプションを海響館で開催(28日)</p> <p>山口経済研究所はIWC会合の経済的波及効果は4億4500万円と発表。さらに下関市の認知度は大とする(30日)</p> | <p>シーモール内の中野書店で鯨関係の本を集めた「イルカクジラフェスタ」を開催(27日報道)</p> <p>24日開店の観光魚市場「カモンワーフ」に、鯨の専門店「鯨屋」が開店。刺し身、竜田揚げなどのメニューのほか、カツサンドやソーセージを使ったレトロドッグに鯨肉を使ったライスバーガーなども販売</p> <p>鯨切手デザインの新藤本さんに中国郵政局が記念盾を贈呈(25日)</p> <p>滋賀県米原中学校が修学旅行で調査捕鯨船第25利丸を見学し、下関コンベンション協会が設定した「クジラを学ぶコース(半日)」を利用(26日)</p> <p>スーパーの新聞折り込みに「日本の食文化「鯨」WelcomeIWC2002」として鯨製品が掲載される(30日広告)</p> |
| 5月上旬 | <p>9日科学委員会が終了</p> <p>10日科学委員会の各分科会の議長による打合会を開催</p> | <p>下関青年会議所はIWC下関会議のマスコットマークを同野球部「下関海響ホエールズ」(今年度から命名)として使用(3日)</p> <p>海峡メッセ会場に下関郵便局が臨時出張所を設置(8～24日)</p> <p>科学委員会終了に伴うレセプションを春帆楼で開催(9日)</p> <p>商業捕鯨再開を求める署名20万人分の署名簿を政府に提出(9日)</p> | <p>下関大丸で「くじらまつり」が開かれ、鯨料理の試食会を開設(1～7日)</p> <p>市内の小中学校50校で鯨肉カレーの給食を実施(2日～21日)</p> <p>鯨料理専門店の「下関くじら館」が、外国人向けの格安鯨定食「セットホエール」を提供(1日)</p> <p>捕鯨記録映画「鯨捕りの海」を下関で上映、パンフレット「もっと身近にくじら」(6日)</p> <p>下関短期大学附属高校で鯨をテーマにした岸本さんの「下関と捕鯨について」の講演(8日)</p> |
| 5月中旬 | <p>12日～18日加盟国の分担金拠出方法や、商業捕鯨再開の条件となる改訂管理制度(RMS)について協議する作業部会を開催</p> <p>英環境・食糧・農村省副大臣がIWCの新加盟国の「票買い」に懸念を表明(15日)</p> <p>内陸国モンゴルの加盟が受理された(16日)</p> <p>20日第54回IWC下関総会が開会(海峡メッセ)、</p> | <p>IWC会議出席の外国人科学者らが長門市の招待で長門市を訪問し鯨墓などを見学、パネルディスカッション「鯨文化へのいざない」を長門市主催で開催(11日)</p> <p>IWC会議出席の外国人科学者らが下関市熊野小学校を訪れ鯨について質問をうけた(水産庁のアイデアで実現)(14日)</p> <p>IWC科学委員会議長が下関市長を表敬訪問(16日)</p> <p>19日からの総会期間中、県警本部に「IWC総会警備本部」を設置する</p> <p>グリーンピースジャパンが会場近く(市婦人会館)で市民と捕鯨問題を語り合う「グリーンピースひろば」を設置(19～23日)</p> | <p>下関信用金庫別館で「くじらと下関」のパネル写真展(13～24日)</p> <p>鯨館表面のお色直し完了(16日)</p> <p>IWC下関会議開催を記念した寄席「鯨亭」を開催、後半下関市長を交えた鯨討論会を開催(18日)</p> <p>市民風揚げ大会でIWC風を揚げる(会場アルカポート)(19日)</p> <p>持続的利用世界議員連盟の臨時会合が、12ヶ国から国会議員など60人が出席して開催された(19日)</p> <p>捕鯨反対の国やNGOに抗議する右翼団体の街頭宣伝車160台が、会場周辺でデモ走行を繰り広げた(19</p> |

| 月 | IWC会議関係 | 山口県内におけるIWCへの対応 | 山口県域における鯨関係の報道 |
|------|---|--|---|
| 5月中旬 | 下関市長が開会挨拶。 アイランド加盟は承認されず退場 | グリーンピースジャパンなど4団体でつくる「クジラ保護連絡協議会」が海峡ゆめ広場でライブコンサート開催、続いて市婦人会館で「クジラ保護シンポジウム」グリーンピース・インターナショナルが下関市で記者会見し、日本がIWC新規加盟国の票買いをしていると批判(19日) 海響館で歓迎レセプションを開催(20日) | 日午後) 「地域社会と鯨に関する全国自治体サミット」を下関市で開催した(20日) 全国の「鯨のまち」から、商業捕鯨早期再開を求める200人が市役所から会場近くまでデモ行進した(20日) |
| 5月下旬 | 20日～24日第54回IWC総会開催(加盟国44ヶ国ほかにオブザーバー1) 米国務省副報道官が米口先住民捕鯨枠否決で日本を強く批判(24日) | IWC下関会議推進協議会は、会場近くのホールでレセプションを開き、鯨づくしの料理をふるまった(21日) IWC下関会議総会の模様がインターネットのホームページ「鯨ポータル・サイト」で生中継される、ダイジェスト版も公開 下関市長がIWC会議受け入れ態勢を総括し、下関を世界にPRしたと評価(28日) | 市民団体「海の幸に感謝する会ウーマンズフォーラム魚」が市民館中ホールで全国シンポジウム開催。テーマは「クジラから世界が見える!世界から下関が見える!」、続いて「商業捕鯨再開と21世紀の食料」の題でトークセッションを行なう(21日) 無線操縦の鯨形清掃船IWCが唐戸棧橋近くで試運転(21日) 米の動物福祉団体メンバーが海峡夢広場で、鯨の着ぐるみ姿で「食の安全」を訴える(24日) |
| 6月 | 24日駐日米大使が、日本政府が米口の先住民捕鯨枠反対を取り止めるとの連絡が駐米日本大使からあったと発言し、水産庁も認める | 下関市議会で江島下関市長が、今後クジラの街として活性化を図る旨を発言(12日) IWC下関会議推進協議会解散(25日) | 下関くじら食文化を守る会総会が12日開催 第25利丸・第1京丸が調査捕鯨のため北洋へ向けて出港(28日) |
| 7月 | | IWC下関会議成果報告会を開催(23日) 下関市立大学公開教養講座「鯨大学」が終了(15日) IWC下関会議推進実行委員会解散(31日) | クジラの植物造形が海響館入り口前に引っ越し(1年契約)(13日) |
| 以降 | | 12月15日付け市報に、2002年市政重大ニュースの一つとして「国際捕鯨委員会(IWC)下関年次会議開催(4・5月)」を掲載 | 10月下関くじら食文化を守る会の会誌「いさな」4号発行 |

(前田博司作成)

IWC下関会議に関わる新聞記事量
(毎日新聞・平成14年)

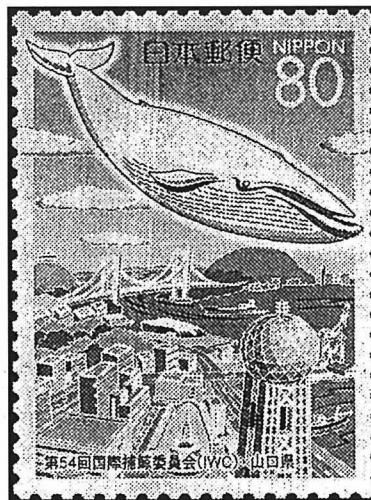


*記事量をcm²で算定した。

付属資料(3)



平成14年1月に発売されたPRキャンペーンマーク缶バッジ



平成14年4月に発売されたIWC記念切手